

製本のススメ

Vol. 81

街の景色が急に秋らしくなりました。慌てて長袖をだした人も多いのではないのでしょうか？ちょっと前までは冷やし中華だったのに、最近はおでんが食べたいですね。温泉も絶好の季節です、秋っていいですねえ。

今回は**紙目の応用編**の話し

さて、このススメでは、紙目について何度も厳しく目にタコが出来るほど読んだ方も多いと思います。「紙目は製本の絶対条件であり、逆目で作る本など有り得ない！」訳です。しかし、**あえて紙目を逆目で使うもの**が、実は有ります。むろん使う条件は限られてきますので、何にでもというわけには行きません。

例えば、観音折では用紙の厚みに制限がありますが、逆目で折った方が、用紙に腰があり折り易い場合があります。またDVDなどのジャケット(両脇にミシン目が入る物)も、逆目の方が挿入機械でのトラブルが少なく、スムーズだそうです。また、卓上カレンダーの台紙の様に、コシや張りの強さを使いたい時にも逆目で使います(この場合折り目には筋入れが必須です)また、一般に売られているコピー用紙も縦目が多く、A4コピー用紙でA5の折り丁を作ると、逆目になってしまうわけです。縦目の方がコピーの再にも用紙のカールが少なく、扱い易いからでしょうか。

実は当社の会社案内(上製風リング加工)も、背と小口のコーネル部分は、あえて逆目を使っています。紙の弾力性を利用して背中部分の丸みをだしています。

さて、ここまで読んで気づきましたか？この逆目使いには『**糊を使っていない**』のです。あくまでも水分を含まない場合にのみ許されます。したがって無線綴冊子には逆目を使えません。ホットメルトでさえ湿気が僅かにあり、背の歪んだ本になります。

逆に湿気を使わなければ良い訳ですから、ポスターやチラシのように断裁だけなら問題はありませし、リング加工ならば紙目は問題ありません。

余談ですが、当社の会社案内では禁手である糊を使っています。これには、糊の種類と濃度・紙の性質とを微妙に調整した裏技が沢山使われています(もちろん採算性は度外視です)しかし誰も気づいてくれないので書いてみました(汗)



Teabreak

この季節、各地で文化的イベントが開催される事が多く、和綴じ体験コーナー等の依頼も舞い込んできます。和綴じで人があつまるのかな？と置いていたら、これが結構人気です。和綴じは製本方法の一つですが、あくまで手作業で、味わいのある装丁が人気なのかもしれません。また綴糸の質感や色合い、糸運びの美しさは、本を芸術品に変えるほどです。

by (株) 井関製本